

- ▶ 山口の天気
[各地の天気]
- ▶ ニュース
- ▶ 朝日懇話会やまぐち
- ▶ 企画特集
- ▶ 高校野球
- ▶ 読者の広場
- ▶ 朝日新聞社のイベント
- ▶ 朝日さんさん広場
- ▶ 地域の取材網



home > MYTOWN > 山口 >

企画特集

[長州ファイブの挑戦 新時代を求めて]

①伊藤博文 井上勝 井上馨 遠藤謹助 山尾庸三

英国に学んだ情熱

幕末期、長州藩から密航した5人の若者がいた。目的地はロンドン。英国では後に「長州ファイブ」と呼ばれた。彼らが学んだ多くの英知は、明治維新の原動力となり、近代日本の揺籃(ようらん)期を支えた。不況にあえぎ、停滞感が漂う現在の日本。長州ファイブの進取の精神は、現代にも多くのヒントを与えてくれる。

(文・写真 宮地ゆう)

UCLに密航し留学 化学、物理から入門

大英博物館が建ち、広大なリージェント・パークが広がるロンドン。その中心部にユニバーシティ・カレッジ・オブ・ロンドン(UCL)がある。

11月下旬の昼下がり。キャンパス内には、本を抱え、携帯電話を片手に次の授業へ移動する学生たちがあふれていた。れんが造りの建物が所狭しと並ぶ街中の大学だ。

青々とした芝生が敷き詰められた中庭に、黒い御影石でできた高さ約2メートルの石碑が建つ。日本人卒業生や日英友好協会が11年前に建てた「日本記念碑」だ。

「一八六三年及び一八六五年にUCLを訪れ、帰国後近代日本の基礎を築いた先駆者達を讃(たた)える」。こう記された横に、長州藩と薩摩藩から留学した24人の留学生の名前が漢字で刻まれている。その先頭に、5人の名前があった。

伊藤博文 井上勝 井上馨 遠藤謹助 山尾庸三

1863(文久3)年6月。幕府の外交・内政が行き詰まった混乱の幕末期、長州ファイブは英国に活路を求めて横浜港からひそかに出港した。藩も援助した。5カ月後にロンドンに到着し、そってUCLの門をくぐった。化学、物理、英語などの授業を受講したという。石碑を案内してくれたUCL学長代理のフィリップ・トレレヴァンさん(53)が言った。

「UCLは当時から大変革新的な大学でした。イングランドの大学は入学者を白人の男子学生のみ、などと制限していたのに対して、UCLは1826年の設立当初から人種、宗教、性別に関係なく学生を受け入れたのです。日本人が通うことができたのも、こうした大学の風土があったからでしょう」

5人は授業の合間に造幣、造船、鉄道敷設などの現場を視察して回り、最新の技術や知識を精力的に吸収していった。

伊藤は後に、当時を次のように回想している。「毎日通学して朝夕はケミストリーの博士の家に居て算術を学んだり昼間は大学へ行って稽古する、色々さう云ふやうなことをして――」



UCLのシンボルになっている回廊の前に集まった日本人留学生たち。現在、130カ国の約1万8千人が在籍する。電話を発明したベル、インドのガンジー元首相もここで学んだ=ロンドンのUCL構内

地域情報

列島ニュース一覧

- | | | |
|-----|-----|-----|
| 北海道 | 青森 | 森 |
| 岩手 | 宮城 | 城 |
| 秋田 | 山形 | 形 |
| 福島 | 茨城 | 城 |
| 栃木 | 群馬 | 馬 |
| 埼玉 | 千葉 | 葉 |
| 東京 | 多摩 | 摩 |
| 神奈川 | 新潟 | 潟 |
| 富山 | 石川 | 川 |
| 福井 | 山梨 | 梨 |
| 長野 | 山崎 | 崎 |
| 静岡 | 愛知 | 知 |
| 三京 | 滋賀 | 賀 |
| 兵庫 | 大阪 | 阪 |
| 和歌山 | 奈良 | 良 |
| 鳥根 | 岡山 | 山 |
| 島根 | 山口 | 口 |
| 徳島 | 香川 | 川 |
| 愛媛 | 福岡 | 州 |
| 佐賀 | 北九州 | 崎 |
| 宮崎 | 長崎 | 分 |
| 沖縄 | 鹿児島 | 島 |
| | | USA |

新聞購読案内

- ▶ データベース案内
- ▶ ケータイ向けサービス
- ▶ ニュース映像
- ▶ 会員サービス
- ▶ 朝日新聞社から
- ▶ 今日の朝刊

現代の学生、屈託ない目 世界へ

現在、日本人留学生は約140人。大半は長州藩の5人がここで学んだことを知っているが、伊藤博文以外の名前を知る学生はほとんどいない。

そのなかで、「宇部市で育った父親から、幼い頃、英国に渡った伊藤博文の話をよく聞いていました」と話す学生がいた。細胞分子生物学を専攻する3年の中原万里子さん(22)。

高校2年の時に英国の高校へ編入し、「生命科学の最先端を学びたい」とこの分野で業績を上げてきたUCLに入学した。

「長州ファイブは、帰国して祖国に尽くすという義務感に燃えていたと思います。でも、今の日本人留学生にそんな気負いはない。これからは一人ひとりが勉強した分野で貢献できればいいんじゃないかな、と思います」

生化学を専攻する3年の曾根慈凡(よしあ)さん(22)も言う。

「自分の力を生かして、必要とされる場所を探したい。それが日本である必要はないかも知れません」

いま、留学生たちは屈託なく、日本から世界へと目を向けている。

「長州ファイブは日本を変えようとした。私たちもそれぞれの分野で何かを変えたい。そんな思いは同じです」

2人はそう夢を語る。

英国に住んで4年になる中原さんに「今の日本は、閉塞(へいそく)感が覆っている」と映る。「長州ファイブには、外国から少しでも多くの技術や情報を得ようという意気込みがあった。今こそ外から学ぶ姿勢を取り戻すときではないでしょうか」

☆ ☆

「異なる文化から学び合うことがいかに大切なことか。私も日本の研究者との長いつき合いの中で刺激を受け、多くを学びました」

長州ファイブが刻まれた石碑の文字を指でなぞりながら、トレレヴァンさんは話した。

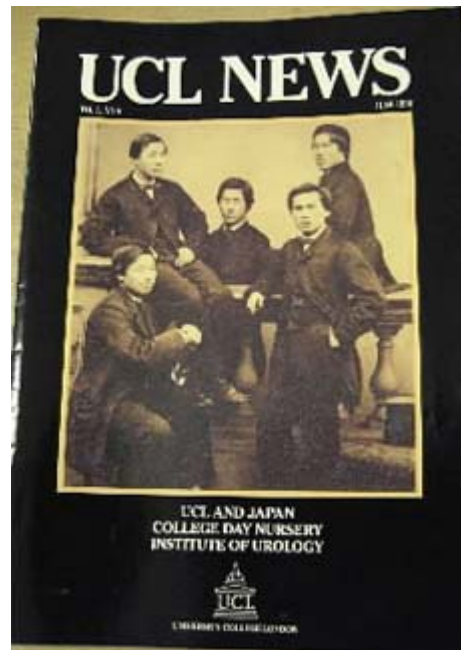
「5人は20代の若さでここに来て本当に多くのことを吸収した。当時は自分たちに国を変えるほどの力があるとは思っていなかったかも知れない。でも、私は学生たちに言うんです。『この人たちを見なさい。あなたたちの力でいくらでも時代は変わるんだ』とね」

☆ ☆

約140年前、長州ファイブが英国から持ち帰った知識や科学技術の集積は、明治の礎になった。5人の業績は、形を変えながら平成の今に脈々と受け継がれている。彼らが残したものに示唆を求めて、山口、そして日本各地の足跡をたどりたい。

■長州ファイブの略歴■

伊藤博文(俊輔、1841～1909)大和町出身。初代内閣総理大臣
井上勝(野村弥吉、1843～1910)萩市出身。初代鉄道局長
井上馨(聞多、1835～1915)山口市出身。初代外務大臣
遠藤謹助(1836～93)萩市出身。造幣局長
山尾庸三(1837～1917)山口市出身。工部卿、法制局長官



大学の雑誌で紹介された長州ファイブ=UCLの記録を保存しているレコード・オフィスで

近代日本の扉開く

偉人が巣立った下宿の街

過去の隣人に寮生感慨

大学の正門前を通るガワー通り。地下1階、地上3～4階建ての黒いれんが造りの建物が、道沿いに整然と並ぶ。多くはUCLの事務所や学生寮だ。

正門を出て南に100メートルほど歩くと、「長州ファイブ」のうち井上馨と山尾庸三が暮らしたガワー通り103番の家があった。黒いドアが二つ並ぶ。向かいの家の壁には「博物学者のダーウィン(1809～82)が1838～42年、この場所に暮らした」と書かれたプレートがかかっていた。

5人は当初、UCLの化学の教授だったウィリアム・ウィリアムソンの家に下宿していた。しかし、教授自身が生活に窮していたため、井上と山尾が分かれて暮らすことになり、新たに下宿先を紹介された。そこは画家の家だったという。

この家にはのちに薩摩藩、土佐藩など8年間に7人の日本人留学生が次々と下宿した。山尾は薩摩藩の留学生と同じした時期もあったらしい。

☆ ☆

家は番号札こそ外されているが、ほぼ当時の状態で残り、今は個人が所有している。

103番の隣にあるUCLの学生寮に住む3年生の電子工学専攻、クリストファー・ホワンさん(21)が「この通りの建物の外観はだいたい当時のままです。家の中のつくりもどこもほぼ同じだと思います」と寮の中を案内してくれた。

地下室には学生共有のキッチンや洗濯機、乾燥機が並ぶ部屋がある。1階の一室では学生たちが集まって勉強会を開いていた。玄関から急な階段を上ると1～2人部屋があり、大学院生と学部生が一緒に暮らしている。

ホワンさんは「この寮は1部屋に一つしか電源のプラグがないし、水が出にくいし、住むのはなかなか大変ですよ」と苦笑した。だが2人が暮らしたことを知ると、「140年前にはすぐ隣に日本の留学生が住んでいたとは。歴史の刻まれた建物なんですね」と感慨深げに語った。



右側のドアが井上馨と山尾が暮らした家。周辺は現在、UCLの学生寮になっている＝ロンドンで

●受講のあかし、大学の歴史に／資料室

厚さ約20センチの深緑の鉄の扉。大学職員のウエンディ・カークビーさんがカギの束から一つを選んで回し、力いっぱい引っ張ると、ドアがゆっくりと開いた。

大学の地下室。10畳ほどの薄暗い書庫には、天井近くまで本棚が並ぶ。

「UCL設立からの歴史を記した貴重な史料ばかりです。書庫の湿度と温度を一定に保っていますが、痛みがひどくて保存は大変です」

カークビーさんはそう言って、分厚い革張りの学生登録簿を開いた。

1863～65年の学生簿中に長州ファイブのうち4人の名前があった。井上勝は正式に受講しなかったらしい。大学職員のペン書きで、化学や数学、地質・鉱物学、土木工学、数理物理学、英語などを受講したとある。

64年7月22日にはそろって分析化学の授業料を支払った記録があった。「伊藤－2カ月分、8ポンド8シリング、遠藤－7カ月分、23ポンド2シリング……」

カークビーさんは「『彼らが学んだ跡を見たい』と、日本の留学生が時々来るので、ほかの記録とは別にしてあるんですよ」と話した。



上から伊藤、野村(井上)、遠藤の名が残る学生登録簿＝レコード・オフィスで

▲②井上勝／鉄道の父、小岩井農場創設 >>

[社会](#) | [スポーツ](#) | [経済](#) | [政治](#) | [国際](#) | [サイエンス](#) | [文化・芸能](#) | [ENGLISH](#) |



ニュースの詳細は朝日新聞へどうぞ。購読の申し込みはインターネットでもできます。

asahi.comに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

[著作権](#) | [リンク](#) | [プライバシー](#) | [広告掲載と注意点](#) | [アサヒ・コムから](#) | [朝日新聞社から](#) | [問い合わせ](#) |

Copyright 2004 Asahi Shimbun. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.